

2013年度名古屋学芸大学健康・栄養研究所 研究・実践報告

■研究・実践の課題（テーマ）

実践性の高い食育教材開発に関する研究と実践―「さかな丸ごと探検ノート」を活用した食育プログラムのマニュアル作成

■主任研究者 足立 己幸

■共同研究者 上原 正子、浅田 由美、伊與田 敬子、林 紫、丸山 真奈美、西尾 素子

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

1) 目的

学校の特徴をいかしながら活用できる食育プログラムのマニュアル，“学校における「さかな丸ごと探検ノート」活用マニュアル”（仮称）の作成に向けて、これまでに行ってきた授業実践例を整理し、学習計画を立案すること、食育プログラムの評価枠組を作成することを目的とした。

2) 方法

これまで共同研究者（栄養教諭）が行ってきた「さかな丸ごと探検ノート」を活用した授業実践をもとに、学校の食育全体計画に位置づけられている指導案を整理した。社会科及び家庭科については教科の目標と食育の目標の関連性や可能性、特別活動については食育の目標の系統性に視点をおいて学習計画、指導案を再検討した。新たな指導案作成にあたっては、共同研究者が分担して作成した指導案をもとに、これまでの研究成果と「さかな丸ごと探検ノート」の継続的活用法に視点をおいて議論を重ねた。さらに、食育プログラムに関する企画・経過・影響・結果評価の枠組案を作成し、企画評価の教材を評価する視点、経過評価の学習者の習得状況の評価する視点を整理した。

3) 結果

学習計画を作成し、特別活動 8 例、総合学習の時間 3 例、社会科 2 例、家庭科 4 例の 17 例、計 19（都市部と海岸部で異なる指導案がある）の具体的な指導案を提案した。教材を評価する視点として内容的側面について科学的根拠、デザイン、多様な展開、教育目標の達成、機能的側面について学習者の発達段階の特徴、理解しやすさ、興味・関心、主体的・積極的、創造的、学習の広がり可能性、支援者の支援しやすさ、学習者と支援者の共有を設定した。学習者の習得状況については、学習目標、食育の目標とともに、知識・理解、関心・意欲・態度、生活を創意工夫する能力、技能、思考・判断・実践の観点から評価が可能であることが示唆された。

4) 考察

食育の視点を十分に含み、かつ、発達段階に応じて「さかな丸ごと探検ノート」のコンセプトを繰り返し学ぶことのできる指導案を提案し、その評価枠組案を作成することができたことは、学校における今後の食育プログラムの評価を可能にすることができ、意義あることと考える。実践可能なマニュアル作成に向けて、学校における授業実践を進めながら、さらなる検討が必要と考える。（名古屋学芸大学健康・栄養研究所年報 第 6 号 1-12 に掲載）